

書 評

D・B・ブロムレー著，勝沼晴雄監訳地域社会 研究所訳「高齢化の科学」

産業能率短期大学出版部，1976年8月，413PP+38（参考文献）

本書の著者ブロムレー氏はイギリスのリバプール大学心理学講座の教授で，同じくイギリスの加齢社会・行動科学学会の設立者で初代の学会長をつとめ，この分野に多くの研究業績をもっている。初版は1966年に出されているが第2版においては大幅に改訂増補されており，この分野における世界的な関心の高まりに対応したタイムリーな出版であり，翻訳である。第11回国際老年学会が1978年8月(XI th International Congress of Gerontology, 20~24 August) 東京において開催されることが決定されており，組織委員会がその準備のため活潑に活動を開始している。本年4月末にはフランスの「生命科学研究所」(L' Institut de la vie) 主催による国際会議“Aging: a challenge for Science and Social Policy” (4月24日から30日までフランスの Vichy で開催) が開催される。日本人口老年化の問題は，政府のみならず，マス・コミの活動を通じて企業や国民の関心を急速に高めるに至った。このような時期に，本書が勝沼教授監訳の下に，多くの専門家によって邦訳されたことは誠に時宜をえたものといえよう。

2. 本書は原文では「人間の加齢現象の心理」となっており，いわゆる老人心理が中心課題となっているような印象を与えるが，実際には本書は広く生物的，社会的，経済的諸側面を包括した部分から構成されており，老年化の社会生物学的研究とあってよいであろう。

3. 著者は Gerontology (老年学) の用語も時には使用しているが，Gerontology は年をとっていく過程の科学的研究 (P. 1) であるという理解の下に，ageing あるいは aging つまり加齢というダイナミックな過程の下に広汎な分析を行なっている。

4. 本書は「人間の加齢の概念」(第1章)，「人間の加齢の歴史」(第2章)を序論として扱ったあと，第3章「人間の加齢の生物学的側面」，第4章「人間の加齢の社会的側面」，第5章「仕事と技能に及ぼす加齢の影響」，第6章「成人の知能に及ぼす加齢の影響」，第7章「知的，社会的および運動の業績に及ぼす加齢の影響」，第8章「中年と老年におけるパーソナリティと適応」といった重要な課題をとり扱っている。そして，最後に第9章「終末期—死亡と死」，第10章「人間の加齢の精神病理」，第11章「人間の加齢の研究における方法論的諸問題」をとりあげ，第12章「エピローグ」で結んでいる。訳文においても400頁をこえており，全文を読みこなすことはよいではない。読者の関心に応じてどの章から読み始めてもよい。

4. 著者のすぐれた特徴は，いわゆる老年学的思考の態度をとらず“社会的・行動科学的ジエロントロジー”といったダイナミックな理解をもっていることであって，その固有の任務は「老齢化の個人や社会への影響に関する事実と理論を確立することと，老齢化によって起こる好ましくない結果を防いだり，少なくしたりする方法を発見することである」(P. 409) といっていることは特に注目すべきであろう。

5. 加齢化あるいは老齢化の人口学的分析は，著者の専門や本書の目的からいってあまり行なわれていないことも止むをえないであろう。しかし，加齢化による人口の年齢構成の変化の社会的，経済的影響についての理解に多少欠けていることが気になる。「人口の年齢構成の問題は今日においては，さほど重要ではない」(P. 125) また「人口規模の方がより深刻な問題なのである」(P. 125) といっていることは，今日のすでに人口老年化の著しいイギリスについての見解にすぎない。

6. 勝沼教授が監訳者としてのまえがきの代わりに「高齢者の社会適応」を冒頭に書かれているが，同教授の示唆にみちた独立論文であり，傾聴に値するものであることを附記しておきたい。(内野澄子)